

60秒先の未来、
教えます

登場人物
紹介

オルソ

特殊部隊の副隊長。熊の姿をした獣人。頼りがいがある近所のおちゃんキャラ。

ミカ

特殊部隊の隊員。「魅了」の力で人を虜にする吸血鬼。オネエ言葉を使うが、実は超がつくほどの女好き。

アルダ

特殊部隊の隊員。真っ白でモフモフの狼に変身できる。イケメンなのに極度の女嫌い。

リュシアン

皇帝の侍従武官。次期騎士団長と目されていたため、今の職務には納得していないらしく――？

ユーリ殿下

皇帝の異母兄。いつも穏やかで優しく、庶民からも人気がある。

ヴィクトール陛下

ルド＝ラドナ王国の皇帝。幼いながらも聡明で器量もあるが、愛情に飢えている。

シド(狼)

シドが魔法で変身した姿。ひかりが昔飼っていた犬のクロに似ている。

シド・サンティエール

特殊部隊の隊長。異能持ちの隊員たちを上手くまとめている。自身も魔王を倒した英雄の子孫で、チート級の強さを誇る。

佐木見ひかり(ルーシア)

神社の娘。先祖から「夢視」の力を受け継いだ。召喚先の異世界で、特殊部隊に入ることに。訓練によって60秒先までの未来を予知できるようになった。

目次

60秒先の未来、教えます

7

番外編 これに夢か現実か？

279

60秒先の未来、
教えます

プロローグ

私——佐木見ひかりは五歳の頃、とても怖い夢を見た。
短い悲鳴と共にベッドから飛び起きると、冬だというのにパジャマが汗でびっしょり濡れていたのを覚えている。

微かに震えていた私の手を、飼い犬のクロがぺろりと舐めた。

「クロ……」

小さく呼びかけたなら、普段は決してベッドの上に乗らないクロが迷うことなく飛び乗ってきた。そして目の前でお座りをし、心配そうに私の顔を覗き込む。

私はクロの身体に手を回してギュッと抱きつく。犬の高い体温を感じて、ようやく落ち着きを取り戻した。

「クロ、いつしよに寝よ？」

布団を少し持ち上げると、クロは嬉しそうに中に入ってくる。

「おやすみ……クロ」

「くうん」

返事をするように鳴いたクロ。ぴったりと寄り添うと、柔らかな黒い体毛が心地よかった。人間よりも少し速めの心音を聞きながら、私はもう一度眠りに落ちていったのだった。

次の日の朝、クロと連れ立って一階へ下りていくと、キッチンに立っている父の姿を見つけた。

「パパ……」

「おはよう、ひかり。どうした？　なんだか元気がないようだが、熱でもあるのかな？」

父は料理の手を止め、私のおでこを触る。

私はそれを受け入れつつも首を横に振った。

「ちがうの。きのうの夜ね、とてもこわい夢を見たの」

その夢は、今でもはっきりと覚えている。

——まるで生き物のように燃え上がる炎、悲鳴をあげながら逃げ惑う人たち。

落ち着いていた心が再びざわめく。思わず泣きそうになった私の背中を、父は優しく撫でてくれた。足元で伏せていたクロも心配そうに「くうん」と鳴いて、私にすり寄ってくる。

「夢におばけでも出てきたのかな？」

「ひかり、おばけはこわくないもん！　クロがいるし……」

クロは半年前に我が家に来てきた新しい家族だった。五歳の誕生日に母が買ってくれたオスの犬。真っ黒な毛並みを見た瞬間、私がクロと名付けた。それ以来ずっと一緒に過ごしていたので、兄のような、弟のような存在だ。

だが、我が家に家族が増えたのは一瞬だった。クロが来た二週間後、母が交通事故で死んでしまったのだ。

「……それに、ママもきつとお空からみまもつてくれてるもん」

父も母のことを思い出したのだろう……どこか悲しげな笑顔で、私の頭を撫でた。
「じゃあ、どんな夢を見たんだい？」

「……大きなお店がもえて、あつくて……たくさんの人がさげびながら逃げたの」
とてもリアルで、夢なのに熱さと焦げくささを感じた。まるで自分もそこにいるかのような錯覚に陥り、天井のガラスが割れて降り注いできたところで飛び起きたのだ。

父は目を見開いたあと、ひどく辛そうな顔をした。

「そうか……。ひかりは『夢を視た』か」

父は床に膝をついて、目線の高さを合わせる。そして私の肩に両手を添えた。

「いいかい、今からお父さんは少し難しい話をする。今のひかりにはまだ理解できないかもしれないけれど、聞いてくれるかい？」

「いっつになく真剣な父の様子を見て、私は緊張気味に頷いた。」

「ひかりは自分のおうちがよその家とは違うなって思ったこと、あるかい？」

私の家は神社だ。そのくらいは三歳頃から知っていた。

頷いた私を見て、父は話を続ける。

「私たちの氏名である『佐木見』はね、代々『先見』を生業としてきた一族なんだ」

初めて聞いた言葉に私が首をひねると、父は苦笑を漏らす。

「ちよっと難しかったね。……昨日の夜ひかりが視た夢は、これから本当に起こることなんだ。だからその夢を元にして、どこでいつ何が起こるのか、被害はどれくらいなのかを調べなくてはならない」

あの悪夢と同じことが現実起こる？ そう知らされた私は動揺した。

「怖いかい？」

優しく問う父に、私はゆっくりと頷く。

「そうだね。無理もない。ひかりはまだ五歳だもん……でも昨日視た夢をひかりがしっかり思い出してくれたら、たくさんの人を救えるかもしれないんだ。すごいだろう？」

「……ヒーローみたいに？」

人を救う——その言葉で私の頭の中に、最近ハマっている戦隊ヒーローが浮かんだ。女の子が戦隊ものなんて、おてんばだと思われるかもしれないが、とにかく格好いいのだから仕方ない。

『この世界は私が救う！』という決めゼリフとポーズを、私がよく真似ているのを思い出したのだろう。父が笑って尋ねてくる。

「そうだね、ひかりもヒーローになれるかな？」

憧れのヒーローになれるというのは魅力的な誘いだだったが、怖いものは怖い。そのため、すぐに頷くことはできなかった。

そんな私の背中を押すかのように、父は更なる一手を投じる。

「母さんも佐木見神社の巫女として、同じことをしてたんだぞ？」

「ママもヒーローだったの!？」

驚いた私が興奮気味に叫ぶと、父は苦笑を浮かべた。

「母さんは『夢視の巫女』といってね、その力を使って人を救っていたんだ。佐木見家は『先見』の中でも夢を通じて未来を視る『夢視』の一族で、大きな災害を何度も予言してきたんだよ」

よくわからなかったが、母も自分と同じような怖い夢を視ていたことは理解できた。

「ママといっしょかあ……」

嬉しくなる私とは反対に、父は顔を曇らせる。

「本当なら、ひかりかお兄ちゃんのとどちらかが成人してから力を受け継ぐはずだった。だが『巫女』であった母さんが死んでしまったことで、たった五歳のお前に力が渡ってしまったようだ……私が代われるものなら代わってやるんだが……すまない」

辛そうな父の表情を見て、私は悲しくなった。

「どうしてパパじゃダメなの？」

頭をそっと撫でてあげると、父は下を向いて目を拭う。顔を上げた父の目は、少し赤くなっていた。

「ここ『先見神社』は、母さんの生まれた家だ。私には佐木見の血が流れていないから、ひかりか直哉お兄ちゃんのとどちらかでないダメなんだよ……母さんが死んでしまったときに覚悟はしていたが、今年十五歳になる直哉ではなく、五歳のひかりが受け継ぐとは……子供たちから母を奪った

あげくにこのような……運命は残酷だな」

途中からなんとか絞り出したような掠れ声になってしまい、うまく聞き取れなかった。それに内容も難しくさっぱりわからない。ただ、父がひどく苦しんでいるのだけは伝わった。

「パパ、だいじょうぶ？」

「ああ、ありがとう。どうしてこう思うようにいかないんだろうな……子供のひかりに『先見』の力は酷すぎる……」

落ち込んだ父の姿を見て、私は必死に励まそうと頑張った。

「ひかり、ずっとヒーローにあこがれていたの！それにクロもいるし、ママとおなじことできるよ！もうひかり五さいだもん！」

「……ありがとう。ひかりは強いな」

その後、父は見たことがないほど真剣な表情になり、昨夜視た夢についてたくさん質問してきた。燃えていたのはどんな建物だったか、看板などは見えたか、何時くらいだったか……

できる限り思い出しながら答えると、父はいつもの穏やかな表情で私を抱きしめてくれた。

「ありがとう。これからも夢を視たら、お父さんに教えてくれるかな？もし怖ければ、お父さんの部屋に来てもいいからね」

「うん。でもクロがいるからへいきだよ。きのうの夜も、ずっといっしょにいてくれたんだ」

「そうか、クロはひかりと仲よしだからな。クロ、ひかりをよろしく頼むよ？」

父は、キッチンの床でお座りをしたまま餌を待つクロの頭を撫でた。

「くうん……」

クロは撫でられて嬉しそうだが、それよりもお腹が空いたと言いたげだ。

そこで私のお腹もグウツと大きな音を立てた。父が声をあげて笑う。

「さ、クロもひかりもお腹が空いているみたいだし、お父さんは朝ご飯を完成させないとな！」

「うん！」

「わん！」

これが『夢視の巫女』としての、早すぎるデビューだった。

第一章 これは夢か現実か!?

——ピピッ、ピピッ、ピピッ。

目覚まし時計の電子音で目が覚めた日は、私にとって嬉しい日である。逆に明け方、悪夢にうなされて飛び起きるのが最悪の日と言えた。

「……でも土曜の朝に聞くと、さすがに恨めしく感じるわね」

社会人生活も五年目になるが、早起きだけは未だに辛い。休みの日くらいゆっくり起きようと思っていたのに、昨夜アラームを解除するのをすっかり忘れていたらしい。

私はベッドの中から手探りで目覚まし時計を探し、停止ボタンをバシッと叩いた。

パジャマのまま一階のリビングへ下りると、十三年前に結婚して家を出た兄の直哉と、今年十二歳になる甥の明人の姿があった。

「ひかりさん、おはよう」

「お前がこんなに早く起きてくるなんて……せつかくの休日が雨になるからやめてくれ」

兄は時計の針と私を見比べて笑っている。言い返したいところだが、寝汚いのを自覚している私は何も言えず、明人にだけ挨拶を返す。

「明人、おはよう」

キッチンから出てきた父は、私を心配そうに見ている。きっと夢視が悪くて早起きしたとでも思っているのだろう。

「おはよう、ひかり。今朝はどうだ？」

父からコーヒーを受け取りながら、首を横に振る。

「夢は見たけど、『夢視』の力とは関係ないと思うわ」

「どんな夢だったんだ？」

それでも心配そうな父に、私は夢の内容を話し始める。

「見た目がまんま熊の紳士とか、胸がぺったんこのオネエさまが出てくるんだけど……興味ある？」

父は目を見開いたあと、苦笑を漏らす。

「……いや、聞かないでおくよ」

「久しぶりに楽しい夢だったんだけど、きつと普通の夢よね。他にも狼男とかエルフとか魔法使用とか色々出てきたわ。今日見た夢はそれだけ」

「そうか、わかった」

夢の記憶が薄れていない朝のうちに、昨夜見た夢を伝える。それが私と父の習慣だ。五歳の頃から続けているので、かれこれ二十二年になる。当時と変わったのは……私の傍からクロがいなくなったこと。

私はカウンターのの上に飾られたクロの写真に目を向け、心の中で『おはよう』と挨拶する。これも毎朝の習慣だった。

写真立ての中のクロは、すでに老犬だ。私が大学に合格したときに記念として撮ったもので、この一年後にクロは息を引き取った。

真つ黒な毛は長くてフワフワしており、青い目は空のように澄んでいて、とても穏やかな犬だった。大型犬にしては長い十四年という時を、私たちと共に過ごした。

クロは私の兄弟であり、友だちであり、時には親代わりでもあった。

クロの死後、悲しみに沈んでいたら、父が新しい犬を飼うかと言ってくれたが、私は迷った末に結局やめた。母の代わりがいらないのと同じように、クロの代わりもないからだ。

大人になった今は、夢に怯えることもなくなった。それでも時折クロの温もりや、手触りが恋しくなる。

クロには随分と助けてもらったのに、何も返せないまま死なせてしまった。クロが死んで八年経つても、たまに姿を探してしまう自分がいる。

もう一度、叶うことならあの身体に抱きつきたい。

「ねえ、ひかりさん」

明人に声をかけられ、私はハツとした。どうやら一人で感傷に浸ってしまっていたようだ。

「なあに、明人？」

そう言っただけで明人のほうを見る。黒い髪と涼しげな目元。子供らしくふっくらとしていた頬は最近シャープになり、男らしさが出てきた。あと数年もしたらモテモテになるだろう、自慢の甥っ子だ。まだ小学生だなんて信じられないほど落ち着いた子だが、珍しく不安げな様子でこんなことを言

い出した。

「実は、僕も今朝似たような夢を見ました……そんな現実離れた夢を同時に見るなんて、変じゃないですか？」

真剣な表情の明人に、私も真面目に答える。

「そりゃ、絶対にただの夢だと言いつけることはできないわ。けれど少なくとも私の知る限り、親父ギャグを口にする熊なんて実在しないわね。もちろんエルフや魔法使いも……ちなみに明人の話、どんな夢だったの？」

「はつきり覚えてるのは、子供の王さま。誰かに命を狙われてるみたいでした。それを守ってるのが魔法使いとか狼男とか吸血鬼とかで……だけど、結局悪人が王さまを暗殺して国を乗っ取ってしまっただけです」

明人の話を聞いて、私は首を傾げた。

「うーん、私の夢とはちょっと違うかなあ。私が見たのは勇者が魔法使いとか狼男とかを従えて魔王と戦う夢だったもの。最後は勇者がお姫さまと結ばれてハッピーエンド」

私がそう告げたとき、兄が何かを思い出したかのように声をあげる。

「あ！ それって母さんがよく寝る前に聞かせてくれた物語じゃないのか？」

「正解！ 昨日書齋でその元ネタっぽい本を見つけて読んでたの。寝落ちするまで読んでたから、きつと夢に見ちゃったのね」

「またお前は……」

兄に呆れ顔をされ、私は笑ってごまかす。

「だって、途中でやめられなかったんだもん」

ちよつとのつもりが、予想以上に面白くて手が止まらず、いつの間にか眠ってしまったのだ。結果、休日なのにアラームを解除し忘れることになったのだが、まあそれはいい。

「本に夢中になりすぎると、その影響で予知夢が視られなくなるかもしれないぞ？」

「うん、今日は気をつける」

私の返事を聞いて、今度は父が呆れ顔をする。

「まだ読み終わってないのか？」

「昨日のは読み終えたんだけど、続きがあるみたいなの。お母さんが気に入ってた物語だし、続きも書齋にあるんじゃないかと思って……」

母の死から二十年以上経った今も、私物は全て残してあるのだ。

「ね、明人。そんなわけだから、何も心配することないわ、きつとただの夢よ」

「わかりました」

安心した様子で頷いた甥を、親になったような気分で見つめる。

素直で聡明、そして何より優しい子だ。

もし私がこのまま結婚せず子供も作らなかつたら、『夢視』の力は明人に受け継がれるのかな？なんてことを最近よく考える。何しろ私ときたら、二十七歳だというのに会社と家の往復ばかりで、恋愛一つしたことがないのだから。

恋人いない歴と年齢が同じだと知った友人たちは、口をそろえて言う。

『あ、そっか！ ひかりの家って神社だもんね。巫女さんだから恋愛禁止なんだ！ 大変だね〜』
私は曖昧な返事でごまかすが、実際のところ……全く関係ない。

うちの神社の場合、特に恋愛を禁止されているわけではない。現に恋愛どころか結婚までしていた母も、巫女の役目を立派に務めていたのだ。

母の例から、異性とその……肉体関係を結んでも力は失われないことがわかる。だが、それ以外は一切不明だ。佐木見の血筋に力が受け継がれるということ以外、何もわかっていない。

「ところで、お兄ちゃんと明人はこんな朝っぱらからどうしたの？」

兄たちがここに来るのは、年に数えるほどだ。大体はお盆や正月といった長期休暇のときで、こうして週末に来ることはめったにない。

「そうだ、そのことなんだが……ひかりは自分の力に何か違和感はないか？」

父が心配そうに尋ねてくるけれど、何も思い当たらない。

「特にないけど……どうして？」

「なんでも、明人に力の片鱗があったと言うんだ」

「明人に!？」

驚いた私は、明人をまじまじと見る。

「始まりは些細なことだったらしい。駅前のスーパーが閉店するとか、抜き打ちテストがあるとか、夢が現実になることが数回続いた。偶然だろうと思っていたが、近所で交通事故が起きる夢が現実

になり、さすがに変だと思つてここに來たらしい。お前なら何かわかるかも、とな」
「へ？ 私？」
過度な期待をされているようだが、残念ながら私にもさっぱりだ。

「ごめん、何もわかんない。でも、それって私の力が明人に移りつつあるってこと？」
「さあな。そもそもどうやって受け継がれてきたのかも謎だ。今は様子を見るしかない。だが、もし明人に力が移るようなことがあれば——」

「わかつてる。明人にこの神社を継いでもらわねばならない、でしょ？」
父は厳しい顔で頷いた。私としてはこの力があってもなくても構わないが、父には母の代わりに

家を守るといふ責務がある。
「そっか、それで今日の夢のことも心配してたんだ……」

私が視線を向けると、明人は小さな声で「はい」と返事をした。

「私のときは前触れもなしに突然だったけど……人によつて違うのかもしれないし、正直わかんないわ。力になれなくてごめんね。でも可能性は十分にあると思う。偶然で済ますには無理があるもの」

「……なんか、ひかりさんの居場所を奪うようで嫌なんですけど」

「やだなあ！ そんなこと気にしないでちょうだい。私はお嫁にでも行くから」

おどけたふうを装うも、内心は複雑だった。明人はしっかりと知っているとはいへ、まだ子供なのだ。今ならあのときの父の心情が理解できる。『夢視』は子供には酷な力だ。できることなら、あと

数年は私が役目を背負ってあげたい。

今思うのはそれくらいで、二十年以上連れ添ったこの力と決別するかもしれないということに関しては、まだ実感が湧かなかった。

「お嫁について、あてはあるんですか？」

鋭いツツコミを入れてくる明人を、私はキッと睨みつける。

「ないわよ！ 何？ 私に喧嘩売ってるの？」

「い、いえ……」

小学生相手にムキになる私を見て、父が呆れた様子で止めに入る。

「こら！ まったく大人げない」

「だって！」

「とにかく、まだ力が完全に移行していない以上、今の『夢視』はお前だ。しっかりと頼むぞ、ひかり」

「はあい」

奥さんが家で待っているからと言って、兄は明人と車ですぐに帰っていった。奥さんは現在二人目の子を妊娠中で、長時間の車移動はしんどいからと留守番をしているらしい。

父も神社の掃き掃除をするため外に出てしまい、私は一人になった。

「まったく、年頃の女が土曜日の午後、家に一人って……まあいいや、本の続きでも探して読も

うっと」

階段を上って書斎に入る。壁際に置かれたたくさんの本棚には、この神社の歴史から始まり、経済、流通、土木、建築、薬学など、色々な書物が並べられていた。誰が集めたのかは不明だが、中には文字が墨で書かれ、紐で綴じられた古いものまである。

「相変わらず埃っぽいなあ……えーと、あれ？ ないなあ……もしや後ろに落ちてるとか？」

探している本が見つからず、本棚の後ろを覗き込む。

「あ！ 何か落ちてる……きつとあれよね」

母の死後、誰も読む人がいなかったからだろう。うっすら、なんてレベルではない埃が本の上に積もっていた。

「落としたら、落としたり人がつ、拾いなさいよ、ねっ！」

身をよじって無理やり手を伸ばし、なんとか本を拾おうとする。二分近くかかって、どうにか引っぱり出すことができた。

本棚の後ろから出てきたのは、大判で真っ赤な表紙の本だった。

「うへえ、汚い……」

息を吹きかけたら、積もった埃がもうもうと舞い上がる。

「うわっ、ぶっ……失敗した」

耐えきれず私は窓を開ける。差し込む光で埃がキラキラと輝いた。

「まさか本一冊のために、こんな埃まみれになるなんてね。あとでシャワー浴び……あれ？ こん

な表紙だっけ？」

綺麗になった表紙を改めて見ると、探していた本と違うことに気づいた。

「嘘……せつかく頑張ったのに違うの？」

昨日読んだ本は、赤いカバーにタイトルといかにもファンタジーらしいお城の絵が描かれていた。今手にしている本にはカバーがかかっておらず、タイトルもイラストもない。金色で不思議な文様が描かれているだけだ。

その不思議な文様はオカルト映画に出てくる魔法陣のようだった。

「気味悪い……赤いから、てっきり探してる本だと思っちゃった。仕方ない、また探そうっと」

大きくため息を吐いて、本を本棚に戻そうとする。

そこで、ふと手を止めた。

「……これって結局なんの本なのかしら？ 表紙を見た限りじゃ、黒魔術の本って言われても信じちゃいそうだけど……まさかね。せつかく頑張って拾ったんだし、少しくらい読んでみようかな」
恋愛運を急上昇させるおまじないが載ってるかも……なんて不純な動機を抱きつつ、表紙にそっと手を掛けた。

一瞬、抵抗を感じたものの、本の古さと汚れのせいだと思つて強引に開く。

「——っ！」

次の瞬間、光の洪水——なんてありふれた表現だけれど、それがまさに相応しい圧倒的な光に呑み込まれる。

突然のことに声も出せず、本から両手を離して目を覆う。

何も見えない中、足元の地面に穴が空いたように感じた。全てが真っ白で手がかりとなるものは何もないのに、なぜか自分が落ちているということだけは、はつきりとわかる。

「ちよっ、ちよっ、嘘でしょ！」

本の重みで床が抜けたとしても、この穴は少し深すぎないか？ まるでマンションの上層階から落ちていくかのような感覚だ。

「私の家は、二階建てのはずよおおおお！」

やがて肌を感じる空気が変わり、白く染まっていた視界が元に戻った。真っ先に見えたのは、石でできた硬そうな床。

私は衝撃に備え、目を閉じて身体にグツと力を込める。だが落下が止まったとき、想像していたような痛みは襲ってこなかった。

生きていることに安堵して、大きな息を吐き出す。そして恐る恐る目を開けた。

どうやらここは室内のようだ。それもとびきり豪華な……

傷をつけたらとても弁償できないほど高そうな絵画が飾られている。天井には見たこともないくらい立派なシャンデリア。周囲に置いてある調度品も芸術作品みたいに美しい。

「……ん？ 何これ？ 夢？」

もしかして居眠りでもしちゃって、『夢視』の途中なのかしら？

そんなことを考えたとき、すぐ傍から低い声が聞こえた。

「そろそろ人の上から下りてもらいたいんだが？」
びっくりして辺りを見回すけれど、誰もいない。

「下だ、下」
「下？」

そう言われても、私の下には石の床があるだけだ。先程は余裕がなくて気づかなかったが、これまた高そうな石でできている。

「……ん？ 石の床？ その上に座っているにしては、妙に温かくて柔らかい。
」とにかく、いい加減に立て！ 三秒以内に立たなければ燃やしてやる。一、二……」
「へ？」

わけがわからないものの、言われた通り慌てて立ち上がる。

「ちよっとなんな……の、よ……」

自分の座っていた場所を振り返り、私は目を見張った。

「……嘘」

今見ているものが信じられなかった。

でも、ここは夢の中である可能性が高い。それなら目の前の奇跡だって信じられる。

「クロッ！」

そう叫んで、大きな黒い犬に飛びついた。青い瞳が特徴的で、艶やかな毛並みの犬。まさに若い頃のクロそのものである。

ぎゅっと抱きしめて、八年ぶりの手触りと温もりを堪能する。

「クロ！ クロ！ 会いたかった……」

けれど、クロは身をよじって腕から逃げ出してしまう。そして少し距離を取り、じっと私を見据えて口を開いた。

「お前は一体なんなんだ？ さつきから人の上に落ちてくるわ、突然飛びかかってくるわ……」

「え？」

一瞬、耳を疑った。だが、どう考えてもクロがしゃべったようにしか思えない。

「今……クロがしゃべったの？」

「クロっていうのは、まさか俺のことじゃないだろうな？」

「やっぱりクロがしゃべってる……あ！ でも夢ならそれもありえるよね」

クロは八年前に死んでしまったのだから、こうして目の前にいること自体、現実ではありえない。それに本棚と私の体重——ゴホン、で家の床が抜けたのだとしても、こんな見たこともない場所に辿り着くわけがない。

だから、これはやはり夢なのだ。私はそう結論づけた。

「クロ、ほら！ おいで」

呼びながら軽く手を叩いて、両手のひらを見せる。そうすると私の傍に飛んできて、手のひらに顔を擦りつけるはずなのに……

「どうしたの？ ほら、お腹ナデナデしてあげるよ？」

クロは犬なのに、器用にため息を吐いてみせた。

「残念ながら、俺はクロではない……いい加減、クロから離れてくれると嬉しいのだが？」

私は再びクロに飛びかかると、抱きついてお腹や耳を撫で回す。

「だってクロじゃん！ この手触り！ この身体！ この目……って、あれ？」

私はクロの顔を両手で挟み、まじまじと観察する。

「……クロの目って、こんなだっけ？」

同じ青色ではあるものの、目の前のクロの瞳孔は猫のように縦に細くなっていた。

「確か真ん丸な瞳孔で、可愛らしく好き好きって訴えてきていたような？」

「だから言っているだろう。そのクロとやらではないと。俺の名はシドだ」

「ずっと私のなすがままにされていたクロ……いやシドは、ムスツとした表情で告げる。

「なんだ……本当にクロじゃないんだ」

「クロが何者かは知らないが、そんなに似ていたのか？」

「うん……もう八年も前に死んじゃったんだけどね。夢の中でなら、もう一度会えたとしても不思議じゃないかなって……」

その言葉に、シドが目を見開いた。

「夢？ ここが、お前の夢の中だど？」

「だって私は家にいたんだもの。書齋の本を開いた瞬間、光に包まれてここに来た。そんなの夢に決まってるでしょう。それ以外に、この不思議な現象をどう解釈したらいいの？」

私の話を聞いているシドの耳が、時折ピクツと動く。それが可愛くて触りたい衝動に襲われたが、グツと我慢した。

「ちなみに、お前の住んでいたところはなんという？」

「住んでいたところ？ K 県の M っていう町だけだ」

「いや、国の名前だ」

変わった質問に、私は首を傾げながらも答える。

「日本だよ？」

「二ホン……そうだろうと思ってはいたが、やはりそうか」

一人納得している様子のシド。私には何がなんやらさっぱりだ。

「お前に説明しなければならぬことがあるそうだ。……少し待て」

そう言った途端、シドが光り始める。強い光に犬の輪郭が溶けていき、次の瞬間には犬は消え、一人の男性が立っていた。

それも普通の男性ではない。ずば抜けて容姿の整った外国人である。

「え!？」

目の前でとんでもないイリュージョンを見せられた私は、顎が外れるくらい大口を開けた。

「え？ え？ どういうこと？ え？ 何？ シドは？」

「一時的に姿を変えていただけで、こちらが本来の俺だ」

男性はシドと同じ声で言った。



確かに青い目をしていて髪も黒い……でも類似点といえばそれくらいで、あとは全然似ていなかった。

意思の強そうな眉と、少し皮肉屋っぽい口角の上がった唇。切れ長の目は鋭く、いかにも性格の悪そ……いやSっぽい雰囲気だ。さっきまでの善良そうな犬とは全く違う。

「……それが本来の姿？ 犬じゃないの？」

「一応訂正しておくが、先程の姿は犬ではない。狼だ」

「嘘……」

狼に抱きついていたのかと思うと肝が冷えた。だが元々は人間ならば、食べられる心配はなさそうだ。

「それともう一つ、訂正しておくことがある。大事なことだからしっかり聞け。……ここはお前の夢の世界ではない。現実だ」

理解しがたい内容に、私は言葉を失った。

静かになったのを幸いとばかりに、男性は話を続ける。

「ここは皇帝ヴィクトール・マルク・ルドゥラドナ陛下が治める国、ルドゥラドナだ。お前を召喚した覚えはないのだが……とりあえずは歓迎しよう、異世界人よ」

どう好意的にとらえても歓迎されているようにには聞こえなかったが、まあそんなことはどうでもいい。

「ヴィ、ヴィクトール……皇帝？ 召喚？ 異世界人？」

わけがわからない上に、早口言葉の練習かと思ってしまうほど長い名前。全て覚えることは早々に諦めた。

「……順を追って説明しよう。とりあえず、その開いたままの口を閉じてそこに座れ」視線で促された先にあつたソファアに座る。もちろん口を閉じるのも忘れない。

ソファアは座り心地がよく安定感があった。きつと、とてもいいものなのだろう。

どうやら男性は、この部屋の主らしい。慣れた様子で中央に置かれた机を漁っている。

「あの……」

「少し待て」

そう言うと、彼はペンと書類を手に椅子に座った。

「今から言うことは、冗談でも嘘でもない。全て事実だ。わかったか？」

まだ現実感はないけれど、ひとまず私は頷いた。

「まずは自己紹介からだな、俺はシド・サンティエルだ。お前の名は？」

「佐木見ひかりです」

「出身は？」

それはさつきも聞かれたな、と思いながら答える。

「日本ですけど」

「……聞き方がまずかったな。出身惑星は？」

「わ、惑星？ ……地球です」

こんな質問をされたのは生まれて初めてなので、この答え方で合っているのかどうかもわからない。

「年齢は？」

「二十……七歳です」

サバを読むかという乙女心が働いたが、やめておいた。

「性別は？」

まさかこんな質問までされるとは思っておらず、一瞬言葉に詰まる。

「……女ですけど。あの、私って男に見えますか？」

男に間違われた経験は一度もない。今はメイクこそしていないものの、髪の毛は長いほうだし、胸もそれなりにある。

「色んな世界があるからな。もしここに住むなら、自分の世界の狭い常識にとらわれないほうがいい」

「ここに住む？ 私が？」

わけがわからない展開に、もはやついていけそうにない。とりあえず聞かれるがまま答えているけれど、はたしていいのだろうか？

不安を感じる私をよそに、シドと名乗った男性は私の個人情報を手元の紙に書き込んでいる。

……犯罪に使われたりしないよね？

「では改めて説明しよう。先程も言ったが、ここはルドⅡラドナ帝国という。皇帝陛下が治めてい

る、ゴダール大陸随一の大国だ。俺はルドーラドナ軍の一つである特殊部隊を率いており、ここは城内にある俺の執務室だ」

詳しく自己紹介され、改めてシドを見る。

軍人といえば短髪のイメージだが、シドの髪は長い。黒くて艶やかで柔らかそうな髪を、うなじで一つに束ねている。きつと私の髪と同じくらいの長さがあるだろう。

少し派手な装飾のついた軍服は、彼の体躯にピッタリと沿い、そのスタイルのよさを際立たせている。座ついてもわかる長い手足、引き締まった腰、広い肩幅、厚い胸……身長は優に百八十五センチはあるだろう。

モデルばりのスタイルをしている上に、顔もイケメンときた……うん、やっぱり夢に違いない。こんな完璧な人がいるはずない。

それに見た目だけでなく、これだけの部屋を与えられているのだから、かなり偉い人なのだろう。確かさつき、特殊部隊を率いてるって言ってたけど……

私の頭の中では、全身黒づくめの人たちが防弾ベストを着て、敵が潜伏している建物内へと突入する映像が流れていた。

「お前がとれる選択肢は二つ。一つ目はここに住むというものだ。ただしその場合、我が特殊部隊に所属してもらうことになる」

「ええっ！ 特殊部隊に？ っていうか私がここに住む？ どうして？」

困惑しすぎてそれ以上の言葉が見つからず、口をパクパクさせている私を見て、シドが大きなた

め息を吐き出した。

「いちいち質問を挟むのをやめてくれると助かるんだがな。全ての説明を聞き終えてから、理解できなかったことを質問してくれ」

「でも……、わかりました」

あとで質問に答えてくれると言うし、とりあえず最後まで聞くことにしよう。

「協力に感謝する。さて特殊部隊というのは、一言で表すなら異能者の集まりだ」

「異能者……」

頭の中で流れていた映像がガラガラと音を立てて崩れる。代わりに現れたのは、念動力や透視能力を持つ人たち。こうなると完全にSFの世界だ。

「なぜ信じられないといった顔をする？ お前だつて異能者のはずだが」

「え？ 私ですか？ いえいえいえいえ、私にそんな力はないですよ！」

勢いよく首を横に振る私に、シドは目を細める。

「嘘を吐くな。……いや、無自覚か？」

「嘘なんて吐いてませんよ！」

「だが、お前もなんらかの特殊能力を持っているはずだ。異能持ちでなければ、召喚ゲートは開かないからな」

「さつきから召喚、召喚つて、何を言ってるんですか？」

シドの正気を疑いかけたそのとき、一枚の紙が机の上に置かれた。

「これが召喚式だ。見たことは？」

そこには悪魔を呼び出す儀式で使われそうな魔法陣が描かれている。

「あ……！」

まさか、あの赤い本？

「その様子だと、見覚えがあるようだな」

「これによく似たものを、ここに来る直前に見ました。赤い本の表紙に描かれてたんですけど……」
「召喚ゲートの媒体として使用される物体は、その世界や対象によって様々だ。もちろん書物であつてもおかしくない」

あの本を開くときにわずかな抵抗を感じたのは、その召喚ゲートとやらを開いたせいなのだろう。つてことは、ここはシドの言う通り異世界なの！

「で、お前の異能に心当たりはあるか？」

「……たぶん、『夢視』だと思えます」

思い当たるものはこれしかない。

それを聞いたシドは考え込むように顎に手を当てた。

『夢視』……。五十年ほど前に、同じ能力を持つ子供が来たことがある……その者の名前もサキミといったが……お前の母親か？」

「まさか！」

私は信じられない思いで叫んだ。ありえない。

「黒髪と黒い瞳が印象的な娘だったが……」

そんな人は日本人だけでもごまんといるし、その程度の情報では何もわからない。

私の表情から考えを読み取ったのか、シドは肩を竦める。

「どうやらそちらの世界では、黒髪黒目というのは珍しくなさそうだな。他に特徴といえば……当時は十歳程度だったはずだ。家が神社だとか、これが神隠しの正体か……とか言っていたな」

神社——その言葉に、私はビクリと反応した。

「佐木見という名前で神社の娘……やっぱりお母さん？」

母だとすれば、五十年前に十歳程度という年齢にも当てはまる。だが、まだ信じられないでいた。だって、それなら私が知っている『お母さん』は誰なの？ 彼女は二十二年前に亡くなるまで日本で暮らしていた。だからこそ、『夢視』の力が私に受け継がれたのだ。

混乱する私をよそに、シドは淡々と話を続ける。

「サキミは泣きもせず、静かに俺の話を聞いていた。十歳でその落ち着きぶりだ。きっと将来この冷静さは重宝するだろう——そう思った俺は、ここに残り力を貸してほしいと言ったんだが……彼女は十日後、帰還を選んだ」

「……キカンを選んだつてどういうことですか？」

「選択肢は二つあると言っただろう。一つ目がここで特殊部隊の一員として生活すること、そして二つ目は元の世界に還ることだ」

「え、還れるの？」

頷くシドを見ながら、私は馬鹿みたいに口を大きく開けた。

こういうのって普通、元の世界には二度と還れないもんでしょ!?

いや、嬉しい誤算といえばそうなのだが、なぜか釈然としなない。

「勝手に召喚したあげく軍人として働けなんて言おうものなら、反発する者が出てもおかしくないだろう? ここには望んだ者たちだけが残っている」

「なるほど……」

むしろ反発するのが普通だし、そんな危険分子を軍部に置いておくのは危ない気がする。

「二つの世界を自由に行き来することはできない。同じ召喚ゲートを使えるのは二回だけ。そのうちの一回はここに来るため、すでに使用済みだ」

「ということは、残りは一回……帰還用ということね」

シドはゆっくりと頷いた。

「もし帰還を選んだらどうなるんですか?」

「ここでの記憶は消され、ここに飛んだのと同日同時刻に飛ばされる。つまり、いつもの日常に戻るだけだ」

それを聞いて心の底から安堵した。現金なもので、身の安全が確保されると同時に、この世界への好奇心が湧いてくる。

「ゲートの使用に期限はあるんですか? 例えば、ここでひと月だけ過ごして、あちらへ戻るといふのは?」

「可能だ。過去にはひと月どころか三十年こちらで過ごしたあとで、元の世界へ戻った者もいる」
三十年という言葉に驚きつつも、気になったことを確認する。

「それって、外見はどうなるんですか?」

時だけ戻って姿は戻らずなら、まさに浦島太郎状態だろう。

「本人にすら、ここで暮らした三十年の記憶がないんだ。記憶があるのならまだしも、まばたきの間に三十も年を取った……なんて悲惨だろう? だから記憶に合わせて見た目も戻される。ただし寿命は戻らんがな」

シドの言葉に私は考えを巡らせる。

こんな不思議な体験、二度とできないだろう。逃さない手はない。

それに人生を二度歩めるなんてお得な気もする。とはいえ記憶がなくなる上に寿命も減るのだから、無意味といえば無意味だが……

考えた末、私は少しの間だけで暮らしてみることにした。

「あの……少しの間、ここで暮らしてみてもいいですか?」

いわば招かれざる客である私は、恐る恐る尋ねた。

「問題ない。……だが、お前のような者がここに残ることを選択するのは珍しいな」

「私のような者?」

「平和な世界で何不自由なく暮らしていた者という意味だ。違うか?」

確かに日本は世界でも有数の平和な国だ。それに母を早く亡くしたとはいえ、父や兄やクロのお

かげで毎日笑って過ごしてこられた。

「そうですけど……残ることを選んだ人たちは違うんですか？」

「異能が原因で迫害されていた者や、ここよりも殺伐とした世界にいた者、天涯孤独で元の世界に未練がない者……ここに残るのはそんな者たちばかりだ」

「私だって生まれた場所や時代が違えば迫害されていたかもしれない。そんな立場の人にとつてこの世界は救いなのだろう。」

「だが先程も話したように、こちらに留まる場合はたとえそれが一日であっても、特殊部隊員となつてもらう。平和ボケしているお前には少し辛いかもしれんぞ」

私はウツと言葉に詰まる。

「あの、特殊部隊以外の選択肢はないのでしょうか？ 例えばメイドとか」

「体育の成績が常に『3』だった私に、軍人は無理だと思う。でもメイドなら……少しはできそくな気がする。」

「経験があるのか？」

「いえ……そういうわけでは——」

「ならばダメだ。メイドのような経験が物を言う職務に未経験者を登用して、周りに迷惑をかけるわけにはいかないからな」

「あっさりと却下され、私は頷くことしかできなかった。」

「心配するな。特殊部隊といつても、そう危険な仕事ではない」

「そうなんですか？」

「数百年前は魔王相手に戦つたりもしていたが、今では国の治安維持が主な仕事だ」

「魔王!? 本当に？ 冗談でなく？」

私はシドの言葉に食いついた。怪訝な表情で頷く彼を見て、私のテンションが急上昇する。

——勇者キタコレ!!

「やります!! ヒー……じゃなくて、特殊部隊員になります!!」

戦隊もののピンクになるときが、ついに来た! 幼い頃からの夢が今まさに叶おうとしている! 突然やる気になった私に驚きつつも、シドは冷静に説明してくれる。

「そ、そうか……特殊部隊の一員となれば、ここにいる間は衣食住の全てが保障される。もちろん仕事の対価として給金も支払われるからな。長くなつたが、伝えるべきことは伝えた。質問は？」

「いえ、ありません! ありがとうございます!」

説明し終えたあとも、シドは私を観察するように見つめていた。

「あの……何か？」

「いや、運命とは面白いものだなと思ってな」

「そう言いながら、足を組んで椅子の背もたれに寄りかかる。」

「運命？」

「召喚ゲートは赤い本だと言っていたな？」

私は黙って頷いた。

「おそらくそれは、サキミが元の世界に還るときに俺が渡したものだろう」

どこか懐かしそうな表情を浮かべるシドに、私は恐る恐る尋ねる。

「それって……もしかして、その……お母さんのこと好きだったとか？」

すると、シドは汚物を見るような目を私に向けた。

「相手は子供だぞ？ 本気で言っているのか？」

「まっ、まさか！」

私は慌てて否定する。そして自分の汚れた心を深く反省した。

「サキミは還すには惜しい人材だった。戦闘能力だけなら彼女を上回る者は大勢いたが、状況分析能力に関しては、あの歳にしてすでに並ぶ者がなかった。彼女が帰還すると聞いた俺は、赤い本を渡した。向こうの世界が嫌になったときに開けという暗示と共に」

十歳の子供に、そこまで執着するシドがちよっと怖い。これが恋愛感情なら、立派なヤンデレだ……いや、きつと部下集めはそれだけ大変なのだろう。

「そ、そっか……本を開かなかったということは、母は幸せだったということですね」

記憶の中の母は、いつもニコニコ幸せそうに笑っていた。

『『だった』？ 今、彼女は？』

「……母は二十年以上前に、事故で亡くなりました」

「そうか……幸せだったのかもしれないが、死ぬには早すぎるな」

シドは大きなため息を吐き、とても残念そうだった。

「だが、過ぎてしまったことを悔やんでも仕方ない。今はただ、サキミの魂が安らかならんことを祈ろう」

「ありがとうございます」

私は微笑みながらお礼を言った。

それにしても、こんなところに母を知っている人がいたなんて……ん？ 何か変じゃないか？

「あの……母が来たのは五十年以上前って言ってましたよね？」

どれだけシドを観察しても、しわどころか白髪の本一本もない。彼の話が本当なら七十歳は超えていそうだけど、どう見てもそんな年齢には見えなかった。せいぜい三十代だろう。

私の不躰な視線を真正面から受け止めたあと、シドはニヤリと笑う。

「だから言っただろう、自分の世界の常識にとらわれるなど。俺は今年で百十八歳になる」

「嘘っ！」

信じられなかった。目の前のイケメンが、百十八歳？

「国民の多くはお前たちとそう変わらん寿命だが、俺は少し特殊だな。それに特殊部隊の面々も、かなり個性的なやつらが集まっている。こんなことでいちいち驚いては先が思いやられるぞ。」

ま、還りたいと言うのならきちんと送り還してやるから安心しろ」

母との扱いの差にムツとする。母のときは還すのが惜しくて、赤い本まで渡したくせに！

「ちよっと！ 母のことは引きとめたくせに、ひどくないですか？」

私の抗議に対し、シドはせせら笑う。

「あのときとは状況が違うからな。仕方ないだろう」

「どう違うんですか？」

「そもそも俺は、お前を召喚していない」

「でも、私は召喚ゲートでここに……!!」

「お前は俺がサキミに与えた召喚ゲートを、たまたま開けてしまっただけだ。俺は、ここ数十年は召喚を行っていない。今は昔と違って命の危険にさらされる仕事が少ない上に、優秀な隊員が多く、数は十分足りているからな」

シドはため息を吐きながら続ける。

「だからお前が現れたときは、他国のスパイかと疑ったが……すぐにその疑いは晴れた」

私をチラリと見て、苦笑を漏らす彼。どうせスパイには見えないマヌケ面とでも言いたいのだろう。

「まあ理由は言わないでおく。それにアウター——異世界人特有の匂いがしたからな」

「に、匂い？」

私は臭いのだろうか……？ ある意味マヌケ面呼ばわりされるよりもショックを受けた私は、自分の腕をクンクンと嗅いでみる。だが、特に変な匂いはしない。

「……お前にはわからないだろうが、俺は鼻が利くんだ」

シドは犬歯を見せてニヤリと笑う。

「だがスパイでないことはわかってても、何者かはわからなかったが……まさかサキミの娘だったと

はな……性格が違いすぎて、すぐには気づかなかった」

それきり黙ってしまったシドを見て、私は恥ずかしくなって目を逸らした。母と違って落ち着きがないことは自覚している。

「ここに残るという気持ちは変わってないな？」

シドの問いかけに、私はゆっくりと頷いた。

「ならばさっそく登録を行うが構わないか？」

「……はこ」

私の返事を聞いたシドは、引き出しから紙とガラス製のインク壺を取り出す。そして尖ったペンを自分の指先に迷いなく突き立てた。

みるみるうちに傷口から赤い血が盛り上がる。シドは無表情のままその血を一滴、インク壺に落とした。すると壺の中に入っていた黒いインクが発光し始める。

数秒光ったあと、インクは何事もなかったかのように、元の黒い色に戻った。

「え……何？ 今、光って……え？」

戸惑う私を無視したまま、シドはそのインクで紙に文字を書いていく。それは不思議な文字だった。英語でもなければ、もちろん日本語でもない。

「ここでの名は何にする？ おそらく誰一人として『サキミヒカリ』などと発音できないと思うぞ？」

「え？ でもシドは——」

「隊長だ。ここに残って俺の部下になる以上、シドでもサントイエルでもいいが、必ず隊長を付ける。わかったな？」

「は、はい！ シド隊長は私の名前を普通に呼んでいますが、他の方たちは無理なんでしょうか？」

「俺は何事においても特別だと思っておけ。俺をこの世界の基準にしないほうがいい」

そう言っつて、シド隊長は自信に溢れた笑みを浮かべた。

「特別……ですか？」

「詳しいことは、おいおいな」

「どうやら今は教えてくれないようだ。まあ、出会ってすぐだし仕方ないか。」

名前を何にするかと聞かれても、正直困る。そもそもこの人たちがどういう名前なら発音できるのかさえ知らないのだから。

「特殊部隊で働いている方たちも、皆異世界人なんですよ？ その方たちはどういう名前にしたんですか？」

「この世界にある食物の名前にした者もいれば、元の名前をこちら風アレンジした者、この国のポピュラーな名前を選んだ者など、様々だ」

頷きながら、私は少し考える。

「じゃあ、この国で『光』、あるいは『輝き』って意味の言葉はありますか？」

「どちらも同じくルーシアという。なかなかいいんじゃないか」

その響きにときめいた。ルーシア……ここでの私の名前。

それに決めた私は笑顔で頷いた。

「姓はどうする？ 特殊部隊のチーム名を姓にしている者が多いが」

「チーム名ってどんなのですか？」

「特殊部隊だ。ベッカーを姓にするのが普通だな」

「ルーシア・ベッカー……なかなか私にお似合いだと思いませんか？ 隊長」

シド隊長は、私の問いに笑みで答えた。

「決まりだな」

そう言うと、彼は再びペンを走らせる。そして書き終えたと思った瞬間、先程のインクと同様に突然紙が光り出した。

「ま、また？」

反射的に目を閉じたものの、すぐに光は止む。ゆっくりと目を開けて驚いた。

「……あれ？ 文字が読める!？」

シド隊長の手元にある紙。そこに書いてある内容がはつきりと認識できたのだ。

その紙には、私の新しい名前が書かれていた。

「嘘……さつきまでは、不思議な文字にしか見えなかったのに……」

「文字すら読めなくては使い物にならないからな。これで、この世界の住人との意思疎通には困らなはずだ」

シド隊長は簡単に言っているが、とんでもないことだと思ふ。

「もしかして、これも隊長の力？」

「文字が読めるようになったのは俺の血の影響だが、言葉に関しては元から俺と会話が成立していただろう？」

「あ……」

言われて初めて気がついた。

「召喚ゲートしょうかんをくぐったときに、互いの言葉を変換する魔法をかけてある。異世界人アウタタにとって、言葉が通じないというのは何より不安に感じるものだからな」

私は納得し、深く頷うなずいた。

「よし、名も決まったし、あとはルーシアの能力の確認だな。『夢視』ゆめみと言っていたが、どんな力が具体的に説明してくれ」

あ、もうルーシアなんだ。……なんか変な感じ。

「ええと、予知夢のようなものです」

「どの程度の予知が可能だ？ いつ、誰に、何が、どこで起きるのかまで、具体的にわかるのか？」いきなり突っ込んで聞かれ、グツと言葉に詰まる。

そうだよね、予知夢なんて聞けば誰でもそう思うよね……でも残念ながら、私の力はそんな大したものではない。

「いえ……漠然ぼくぜんとした夢を視みるだけです。夢に知っている人が出てきたら誰かわかりますが、知らない人が出てきても名前とかはわかりません……」

そういったことを突き止めるのは、全て父がやっていた。どうやって相手を見つけていたのかはわからないけれど、中には政治や経済に関わるような夢もあったので、おそらく警察なども繋がつながっていたのだと思う。

「では、例えば三日後の世界を視みたいなどと指定はできるのか？」

私は気まずい思いで首を横に振る。……さっきから、できないと言ってばっかりだ。

「……そうか、今はまだ実戦で使えそうもないな。とりあえず訓練生としてスタートしろ」

「はい、わかりました」

自分の不甲斐ふがなさに情けなくなる。

「そんなに肩を落とすな。訓練によって、能力が大幅に向上した者も多い」

「本当ですか？ 私も……そうなりますか？」

「それはお前の努力次第だ。だが、そもそも短期間しかないつもりなんだろう？ ならば、そこまで能力にこだわる必要もあるまい」

シド隊長の言葉が、『腰かけだから期待してない』なんて聞こえるのは被害妄想だろうか？

「……頑張ります」

「ひとまず今日は休め。頭の中を整理したほうがいい」

私が頷うなずくを見たあと、シド隊長は扉に向かって呼びかける。

「オルソ！ 来てくれ」

「失礼します」

隊長の呼びかけで部屋に入ってきたのは、優ゆに二メートルはあろうという大きな熊だった。「ひっ……」

恐怖で思わず後ずさる。けれど、隊長は熊に平然と話しかけていた。

「こいつは今日から訓練生だ。宿舍まで案内するついでに、一通りの説明をしてやってくれ」「わかりました。さ、嬢ちゃん、行くぞ」

鋭い爪の生えた毛むくじやらの手を差し出され、私の足からへなへなど力が抜けた。石の床の上にぺたんと座り込んでしまう。

「シド隊長、俺じゃないほうがいいのでは？」

「本人がここに残ると決めたんだ。慣れさせるためにも、お前が連れていけ」
「……わかりました」

丸太のような腕に抱えられ、シド隊長の部屋を後にする。目の前には熊の顔。こんなに至近距離で見たのは、もちろん初めてだった。

「新人教育はミカつてやつが担当しているんだが……間の悪いことに今日まで任務で留守なんだ。だから今日のところは俺で我慢してくれな。俺は副隊長のオルソ。いきなり嘔みついたりしないから安心してくれ」

そう言つて笑つた口元には、鋭い歯が並んでいる。恐怖で返事などできるはずもなく、かといって視線を逸そらすこともできず……

毛むくじやらの腕に包み込まれながら、私は異世界に来たんだとようやく実感した。

第二章 英雄の子孫

「起きなさい、可愛い仔こネコちゃん」

異世界で迎えた初めての朝。これまで言われたこともない、歯の浮くようなセリフで起こされた。「ん……あと五分」

私は布団に包まれながら、いつもの寝汚いまだなさを發揮する。

「その可愛い寝顔をずっと見ていたいけど、仕事だから起きなきやダメよ……起きないと、無理やり起こしちゃうわよ？」

うふふ、なんて笑い声が聞こえたところで、ようやく私は飛び起きた。

そうだ……ここは日本ではなく、ルド＝ラドナという異世界の国なのだ。

「あらあ、起きちゃったの？ 残念。せつかく××××なことや、××××なことができるチャンスだったのに」

朝とは思えない過激な言葉の連続に、私はその声の主へと怪訝けげんな目を向ける。

だが、そこには想像したようなエロ親父ではなく、お姉さまと呼びたくなるような絶世の美女がいて、部屋の扉にもたれかかっていた。

「あ、あの……？」